

スカイプ実況中継による和歌山・オーストラリア通信授業の試み

東 悦子、加藤 久美

実践論文

スカイプ実況中継による和歌山・オーストラリア通信授業の試み

Wakayama-Australia Live!:

An innovative international program through Skype Technology

東悦子、加藤久美

Etsuko Higashi, Kumi Kato

和歌山大学観光学部

キーワード：グローバルな視点を養う観光教育、環境と文化、国際交流、実況中継

Key Words : Global perspectives in tourism, Environment and culture, International exchange, Live broadcasting

Abstract :

This paper discusses an innovative project that aimed to develop global perspectives in tourism studies through a live broadcast using Skype technology. Through a two-way broadcast, students experienced various tourist sites overseas and engaged in spontaneous interaction with local staff and visitors. We suggest that this international program utilizing readily-available (free) technology has much to contribute to the future of tourism studies, in which development of global perspectives plays a key role.

本論では、海外の主要観光拠点からのスカイプを利用した「実況中継」を通して、観光における「グローバルな視点」を養っていくことをねらいとして実施したプロジェクトについて報告する。これは、「国際交流・国際理解（東）」、「環境と文化（加藤）」ゼミの共同プロジェクトとして行った。教員（加藤）が海外在住期間に、各地の状況、ビジター対応・管理体制などを、現地スタッフ、観光客とのインタビューを交えて解説、日本側の教員は学生の事前学習、ディスカッション、フォローアップを指導した。学生は、中継を見るだけでなく、質問やコメントで現地のスタッフ、観光客と交流し、「生の」情報、「体験」をリアルタイムで得ることができた。3回行った中継は、それぞれ特徴をもたせ、学生は事前に学習、情報収集ができるようにした。この試みは、無料で手軽に使えるテクノロジーを利用した、革新的な国際プログラムであり、且つ観光教育の一例だと言え、「グローバルな視点」を育むことが必須である今後の観光における人材育成の点で貢献が大きいと考えられる。

1. はじめに

オーストラリア、クイーンズランド州、ブリスベンにある主要観光拠点からの「実況中継」を通して、観光における「グローバルな視点」を養っていくことをねらいとして、オーストラリアと和歌山をつなぐ共同ゼミプロジェクトを試みた。オーストラリアは多民族国家であり、また、世界遺産17カ所中、14

カ所が自然遺産という「自然の宝庫」であることから、両ゼミのテーマに即した話題を提供できると考えられた。具体的には、加藤久美（和歌山大学観光学部教授）がオーストラリア滞在中に、オーストラリア・ブリスベンにおける主要観光・文化教育施設を訪れ、現地の状況、一般・海外ビジター対応・管理体制、観光における役割などを、現地スタッフ、観光客とのインタビューを交えて解説した。

日本側は和歌山大学において、東悦子（同学部准教授）が、加藤、東のゼミ学生とともに中継を受信し学習環境を管理した。中継はスカイプ発信を利用することにより、日本にいる学生も質問やコメントで参加することができ、「生の」交流をリアルタイムで経験することもねらいとした。

各セッションは、それぞれのフォーカスをもたせ、事前学習、フォローアップ・ディスカッション、あるいはフォローアップ・エッセーなどで学習効果の向上に取り組んだ。この試みは、無料で手軽に使えるテクノロジーを利用した、国際プログラムの一例だと言え、「グローバルな視点」が必須である今後の観光において必要とされる人材育成に貢献が期待される。

本稿では、まず「和歌山とオーストラリアを中継しての共同ゼミ」の内容を詳細に報告する。次に、本国際プロジェクトを通して受講者がどのような学びを得たのか、学生の感想並びに教員らの振りかえりを通して、その意義と成果について検証する。最後に「グローバルな視点」を養うことを目的とし

た観光教育の方法論として、手軽に利用できるテクノロジーを用いた国際プログラムの開発とその重要性および課題について述べる。

2. 「和歌山・オーストラリア共同ゼミ」概要

2.1 授業の概要

本共同ゼミは、2010年前期期間において3回に渡り実施した。第1回目は5月17日、第2回目は6月21日、第3回目が7月12日であった。実施時間は、いずれも第3時限(13:10~14:50)から第4時限(14:50~16:20)の間で、毎回オーストラリア側の中継地との時間調整のもとに、3時限目を中心として和歌山側の時間の枠組みを設定した。海外との通信においては、しばしば時差が問題になるが、クイーンズランドと日本との時差は1時間で、その点において双方向の通信は容易であった。

参加学生は、加藤ゼミの学生(3回生4名)と東ゼミの学生(3回生3名および4回生3名)の計11名であった。比較的少人数であったので、会場は研究室を利用し、デスクトップコンピューター(DELL社製)に外付けマイクとスピーカー設置した。それだけの機器で、特に問題が生じることもなく中継が実施できた。さらに3回の中継授業の様子はビデオに記録した。

中継設備に関しては、当初システム情報学センターのテレビ会議システムの活用も視野に入れて会場の選定にあたったが、テレビ会議システムを利用するためには、双方に同様の設備が必要ということで、人員や機器の点で非常に大掛かりなことになる。今後誰もが実施できるような一つの授業モデルとして、できるだけ容易に実施できることが望ましく、同施設で事前に中継実験も行った結果も踏まえ、今回はテレビ会議システムの活用よりはスカイプのほうが有効であると判断した。

本中継のテーマは、主として3点あった。1.「多文化社会の理解」、2.「文化施設の観光における役割」、そして3.「自

然環境を利用した観光」である。各テーマを学ぶのに相応しいオーストラリアの中継地として、オーストラリア・クイーンズランド州ブリスベン市から、1. クイーンズランド大学、2. クイーンズランド州立図書館、現代美術館、3. ローンパインコアラ園が選ばれた。以上の「授業の概要」を表1に示す。

2.2 中継地について

オーストラリアは政治経済面で日本とのつながりが強く、1976年締結の日豪友好協力基本条約30周年を記念した2006年は日豪交流年とされた。また、オーストラリアは、日本がワーキングホリデー制度を最初に締結した国(1980年)でもあり、自然派の若い世代に人気が高い。欧米と比較しての物価の安さ、治安、時差(オーストラリア標準時間は日本+1)、旅行時間(日本—ブリスベン約8時間)などにより、比較的訪れやすい国である。自然の豊富さ(世界遺産-自然遺産は複合遺産を含めて17カ所)に加え、アジアに近い英語圏の多民族国家、おおらかでフレンドリーな国民性、そして、季節が反対であることも日本人にとっては魅力であるといえる。

ブリスベン市(人口176万)は、オーストラリア東海岸中央に位置する、オーストラリア(人口2,100万人)第三の都市で、クイーンズランド州州都である。亜熱帯気候で、平均気温は夏28度(11~2月)、冬(6~9月)18度程で夏は高湿度、多雨、冬は乾燥した晴天が多い。「今日は晴れ、明日は快晴」というように天気の良いさで有名だが、その反面シドニー、メルボルンと比べて「文化のない、バナナ共和国」と以前は言われた。だが最近では「若いエネルギー」を生かした、前衛的な芸術や革新的なイベントが盛んである。市を蛇行するブリスベン川は重要な交通経路、スポーツ、市民の憩いの場ともなっていて、川が一つのランドマークとなっている。クイーンズランド州は2009年、州独立150周年を迎えており、年間を通じて様々なイベントやフェスティバルが開催された。日本からのアクセスは、成田から直行便(JAL)、成田、関空からゴールドコースト行き(JETSTAR)が出ている(ゴールドコーストは、ブリスベンの南約1時間)。格安航空券であるJETSTARを利用し、日本に行くオーストラリアの若者が増えたといえる。

以上のことから、オーストラリアはグローバルな視点から観光を学ぶうえで格好の素材の一つであり、当地で23年の教育・研究経験を持つ加藤によって、学生が先述のテーマを学ぶうえで最適かつ主要な中継地が選択された。3度の実況中継地はオーストラリア、クイーンズランド州州都であるブリスベン市にあり、すべて中心地から車で30分以内である。

3. 「和歌山・オーストラリア共同ゼミ」の実際

ここでは実況中継の実際、参加学生からのコメント(授業終了後のレポートによる)をまとめる。

表1 授業の概要

日程	テーマ	中継地	内容
1. 5月17日	多文化社会	クイーンズランド大学	大学生、大学職員などとのインタビューを交え、多文化社会オーストラリアの暮らし、人々を様々な角度から解説した。
2. 6月21日	文化施設の観光における役割	クイーンズランド州立図書館、現代美術館	ブリスベン川沿いにある「サウスバンク」には、様々な文化施設がある。そこは観光名所として海外、国内からもビジターが多い。その様々な施設を視察し、文化施設が観光地として成功するマネジメント、ビジター対応、施設などについて解説した。
3. 7月12日	自然環境を利用した観光	ローンパインコアラ園	観光施設・運営管理、一般・海外ビジターへの対応についての講義、質疑応答などを行った。

3.1 第一回中継授業「多文化社会オーストラリア」

大学はいわゆる「観光地」ではないが、クイーンズランド大学^(注1)は、州大学5校のうち最大の大学で、その美術館、スポーツ施設、図書館、一般公開セミナーなどにビジターが多い。市内からフェリーで20分ほどの距離であり、周囲5kmにわたる広大なキャンパスを訪れる観光客も多い。また、多文化社会オーストラリアには短期・長期留学生も多く、とりわけ短期の英語留学は、教育・文化活動として広い意味での観光の中に大きな位置を占めると考えられる。

第一回中継授業は、まず加藤がラップトップ式パーソナルコンピューター（マッキントッシュ社製）にハンディビデオカメラ（ソニー製）を接続し、キャンパスを中継しながら、上述のクイーンズランド大学についての紹介を行った。その後教室に移動し、まさにオーストラリアの多文化社会の縮図ともいえる大学から、多様な文化背景を持つ学生や職員の協力を得て、和歌山大学側の学生らとリアルタイムでの交流を図った。双方自己紹介後、互いの大学生活などについて質疑応答を行った。交流の際の言語は英語であったが、日本語学習をしている学生たちとは日本語でのやりとりも可能であった。

和歌山側の出席者は7名であった。そのうち2名は英語圏への1年前後の留学経験があり、1名は1ヶ月の語学留学経験者であった。オーストラリア側の参加者は、大学院研究生で中国とベトナムからの留学生、次に日本語学習者で、出身地はオーストラリア、中国、韓国などであった。最後に、香港出身の図書館司書のウェイウェイ・ルイ氏であった。

授業後の学生のレポートから、交流に関して「多様な国の同世代の学生達と話せたことが楽しかった」とし、その際の手段として英語を聞く、話すというスキルが十分でないと感じた学生には、自身の英語力向上を図ろうという動機づけの機会となったことが判明した。同様に、海外に日本語学習者が大勢いることを知ったことも、自分達にとっての外国語である英語をもっと学ぼうという動機づけにつながったことが記述されていた。

中継に関しては、映像は少し途切れる場合もあったが鮮明で、音声もクリアであった。予想以上の通信状況の良さから、受講学生の一人は映像を見ながら「まるで隣の部屋にいて、話してるよう」と、海外からの通信とは思えないという驚きをあらわしていた。その鮮明な映像で大学のキャンパスを目にして、授業後のレポートでは「クイーンズランド大学を訪れてみたい」という感想も述べている。

3.2 第二回中継授業「文化施設と観光」

ブリスベン市内の南、ブリスベン川沿いにある「サウスバンク（South Bank）」は、1988年にオーストラリア建国200年を記念してエキスポ（万博）が開かれた土地を利用したレクリエーション地域である。図書館、博物館、美術館、アートセンターなどの文化施設の周辺には、公園、バーベキュー施

設、サイクリングルートなどがあり、市民の憩いの場となっている。川はフェリーが往来しており、夏は涼しく、夜は夜景を楽しむことができ、フェリーに乗ること自体が、レストラン、ショップ、ナイトマーケットに加えての観光名物になっている。サウスバンクは国内外からのビジターが必ず訪れる場所であるといえる。その中でも州立図書館、美術館を訪問し、施設の詳細、ビジター対応を中心に、加藤が観光における文化施設の役割について解説した。

文化施設（博物館、美術館、図書館、コンサートホールなど）は各都市のガイドブックや地図に必ず紹介される欠かせない観光地の一つである。文化施設の利用は伝統的には「見る、読む」など受け身であったが、今日では、ショップ、カフェ、パフォーマンス・スペースからインターネットの利用（無線LAN）など、多様でインタラクティブな場所になりつつあるといえる。

第二回中継授業に参加した和歌山側の出席者は9名で、学生達は、先述の事柄に関して実際に図書館や美術館で働く人々からの生の声を通して、各機関の機能や役割について学ぶことができた。最初に担当教員の日本語での解説があり、その後英語での説明を聞くことができたので、聞き取れない場合にも、推測しつつ理解を深めていた。

Queensland State Library（クイーンズランド州立図書館）司書、サイモン・ファーレイ氏による、図書館紹介

（概要）インターネット、映画、セミナー、展示、学習・会議室などすべて無料で利用でき、カフェ、書店もある。州立図書館の大きな役割の一つは、クイーンズランド州に関する出版物（図書、雑誌、パンフレット、ポスター）、映画、写真などの収集、保存、管理であることから、広い意味で観光に大きく貢献しているといえる。

GOMA（Gallery of Modern Art, 現代美術館）教育担当：クレア・ロバートソン氏、フィオナ・クリスチャンセン氏による同館紹介

（概要）展示の他に、セミナー、ワークショップ、映画など豊富なプログラムがあり、特別展をのぞいては全て参加は無料である。学校休暇中には、子供向けのプログラムが豊富に用意され、家族連れが多く見られる。図書館と同様に、「参加型」への転換が興味深い。

3.3 第三回中継授業「自然資源利用型観光」

世界最大のコアラ園ローンパインコアラ保護園^(注2)を「自然資源利用型観光地」の一例として取り上げ、その環境保護政策、ビジター対策などについて加藤が解説した。協力者として、同園マーケティング、教育担当の畑井あかね氏が登場し、和歌山側からの質問に答えてくれた。また同園を訪れていた観光客へのインタビューが行われ、なぜ同地を訪問し

たのか、日本を訪れたことがあるか等のやりとりも生じた。これは全くアポイントなく、その場で偶然に行われたことであった。

和歌山側の出席者は7名であった。事前学習^(注3)としてコアラ園について調べておくことが課されていたが、生の映像を目にするのと文字や写真からの情報では掴みきれない詳細やその場の雰囲気が伝わり、学生達が事前に考えていた質問や疑問は、それを見た時点でかなりのことが解決したことが授業を通して観察された。

また先の突然のインタビューで、それに快く応じてくれたイギリス人旅行者の家族と通信を通して英語でやりとりができたことは、学生に交流の面白さを喚起した様子が観察された。その際に、「和歌山の観光地としてどこを薦めるか」といった突然の質問に当惑し、和歌山についてその良さをうまく伝えきれなかったことを学生自ら今後の課題と捉えることができたことも、授業後レポートから明らかになった。自国や自文化についての知識を蓄えておくことの必要性を痛感する機会となったと考えられる。

4. 授業のふりかえり

4.1. 学生の感想から

3回の授業を通して、各回の通信授業についてレポートとして『感想シート』の提出を課した。その中で「授業の面白さ」と「内容の興味深さ」に関して4段階で評定を求め、さらに自由記述による感想の記入を求めた。その結果をまとめる以下ようになる。

第一回（提出5名、未提出2名）

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 通信授業について：大変面白かった | 4名 |
| 面白かった | 1名 |
| あまり面白くなかった | 0名 |
| 全く面白くなかった | 0名 |
| 2. 内容について：大変興味深かった | 3名 |
| 興味深かった | 2名 |
| あまり興味が持てなかった | 0名 |
| 全く興味が持てなかった | 0名 |
| 3. 感想： | |

- ・クイーンズランド大学に行ってみたくなりました。日本語を勉強している学生がたくさんいることを知り、私も外国語の勉強を頑張ろうと思いました。
- ・自分の英会話はまだまだ通用しないと感じた。現状を知るきっかけになった。今度こういった機会があったら、間違ってもいいので積極的に会話していこうと思う。

第二回（提出9名、未提出0名）

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 通信授業について：大変面白かった | 5名 |
| 面白かった | 4名 |

あまり面白くなかった 0名

全く面白くなかった 0名

- | | |
|--------------------|----|
| 2. 内容について：大変興味深かった | 6名 |
| 興味深かった | 3名 |
| あまり興味が持てなかった | 0名 |
| 全く興味が持てなかった | 0名 |

3. 感想：

- ・日本とオーストラリアの文化施設の設備や運営の仕方、考え方において大きな違いを感じました。オーストラリアの方が市民だけでなく留学生や観光客にとっても使いやすい施設になっていると思います。
- ・オーストラリアの美術館はお客さんと一緒に創りあげていく参加型であり、一方的に作品を提供するだけの日本のものとは大きく違って、子供が楽しむことができることも良い点だと感じました。
- ・図書館や美術館が地域の情報や文化を発信する役割を担っていると思いました。施設を無料で利用でき、外国語で書かれている本も置いている図書館は、多文化社会であるオーストラリアを表しているように感じました。

第三回（提出7名、未提出2名）

- | | |
|---------------------|----|
| 1. 通信授業について：大変面白かった | 6名 |
| 面白かった | 1名 |
| あまり面白くなかった | 0名 |
| 全く面白くなかった | 0名 |
| 2. 内容について：大変興味深かった | 6名 |
| 興味深かった | 1名 |
| あまり興味が持てなかった | 0名 |
| 全く興味が持てなかった | 0名 |

3. 感想：

- ・コアラ園にカフェがあって、そこでだされるコーヒーが全てオーガニックでコップもリサイクル、水も無駄遣いしないように気をつけているということに感心を持った。
- ・日本の動物園とは異なり、実際に動物に触れることや動物が歩き回っている姿をみることができるのは、訪れた人が動物により関心をもつきっかけとなるのではないかと思います。また、教育に力をいれているということも興味深かったです。ただ見るだけではなく、何か学んで帰れるので、特に子供にとっては思い出に残りやすいと思います。

4.2 授業者による授業の評価と課題の検討

4.2.1 オーストラリアサイドから

クイーンズランド大学

学生は特に留学生、また現地で日本語を学んでいる学生を選んで出演してもらったが、いずれも快く協力を得ることができた。これらの学生は、海外とのつながりに興味がある、ま

たは経験している、加えて、英語が第2言語である、あるいは日本語を第2言語として学んでいるという学生であった。授業後レポートや授業観察から、このような学生との交流は、日本の学生にとって、彼らの視野を広げ、言語学習の動機を高める良い刺激になったことが伺われた。今回の中継授業後、クイーンズランド大学の日本語学習者は週2回、自主的に会話練習会をもっているが、その中にこのような中継を取り入れたいと言う声もあがった。これが実現すれば、オーストラリア側、日本側の両学生が、さらに言語学習の動機を高め、言語スキルを磨き、相互の文化などについて学び合う機会となると考えられる。その点から、授業を離れても、自主的な学生間の交流の継続を可能にするためには、教員らがいかにサポートできるかという点も検討の必要があろう。

図書館、美術館

いずれの施設も、教育活動に力をいれているが、海外との中継は初めての試みで、既存のテクノロジーを利用して手軽に実施することができたことに大きな評価を得た。特に図書館はインターネット（無線LAN）のフリーアクセスができることから、利用者が昼夜共に多く、蔵書、資料のデジタル化にも力をいれており、今後このような新しい形の教育活動を共同開発してゆきたいという感想を得た。今回は館内風景を映す時間がなかったため、各施設でもう少し時間を費やすことができたと感じた。

ローンパイン

ローンパインは自然保護活動の一環として教育に特に力を入れていることから、今回の中継活動にも積極的協力が得られた。特に担当が日本人の担当者であることも、日本の学習者の興味を引く点であった。今回は偶然日本人実習生（クイーンズランド大学農学科）の参加も得られ、留学生活に関する話も得られた。当日海外からの観光客からも話を聞くことができたことは、グローバル化を感じさせることであったが、参加者も日本の大学がこのような学習活動を主催していることに興味を示してくれた。ローンパインは後日（9月）にインターンシップの受け入れ先として、和歌山大学観光学部から7人の実習生が活動したが、様々な教育活動の場として今後幅広い可能性があると感じられた。

活動許可

今回、各施設での教育活動としての活動（撮影を含む）許可を得たが、各国における公共の場での映像（撮影）に関する規則を確認することも、このような試みには必要である。

インターネット使用について

クイーンズランド大学、州立図書館では室内設置のイン

ターネット（有線）、美術館、ローンパイン、また、クイーンズランド大学の一部で大学構内を紹介するべく屋外に出るときは無線LAN（大学では大学回線、それ以外はTelstra 3G*）を利用した。映像はパソコン内蔵カメラ、外付けカメラの両方が利用できるように設定し、切り替えに多少時間がかかるものの、外の風景を映すには外付けカメラの利用は扱いが容易であった。他方、特に外付けカメラの場合、映像の遅れ、途切れがたびたび生じた。今後、どのようなテクノロジーが最も効率的であるか、調査をすすめる必要がある。

*携帯用インターネット接続端子

4.2.2 和歌山サイドから

学生達は皆、通信授業を高く評価し、内容にも興味を持つことができた。これは、授業後レポートやビデオ映像並びに担当者の授業観察から明らかである。学生達は、インターネットで多様な国の情報が即座に得られる環境にあるとしても、リアルタイムで海外の映像を見、そこにいる人々から生の声として情報を得ることのインパクトは一層大きい。「百聞は一見にしかず」の言葉通りであるといえる。

通信授業を通して、観光に関わる様々な施設の状況をリアルタイムで視覚的に捉えることができた上に、多様な人々の双方向の交流が可能となり、環境や文化、国際理解など様々な視点から、オーストラリアの観光を捉える機会となったことが観察された。従って、このような通信授業を重ねることが、日本にいながらにして、グローバルな視点から観光を考える経験の蓄積になると考えられる。

今回の通信授業の課題の一つとして、より効果的に双方向交流を活かすには、どのような事前準備やサポートが必要かということが挙げられる。学生達は、リアルタイムで情報を得て、あるいは交流を図りながら、その場で沸き起こる疑問を即座に質問として英語でフィードバックすることが難しかった。個々人の言語レベルの課題もあるが、授業内で言語の橋渡しをしてくれる教員がいるとしても、なかなか自発的に声が出ない傾向が見て取れた。言語の間違いを気にせず積極的に発言してゆける態度の育成、そのためにはどのように教員が関わり、具体的にサポートしてゆくのか、あるいは学生にどのような事前準備を課すことが授業内での積極性や自信へとつながるのかを検討する必要がある。

5. まとめ

本授業の取り組みは、観光のディスティネーションの一つであるオーストラリア・クイーンズランド州における複数の施設からの中継を通して、学生が、観光分野におけますます必要とされるグローバルな視点を養うことを目的の一つとした。

授業の実施方法として、中継にはそれぞれフォーカスをもたせ、「多文化社会、留学」「文化施設の観光における役割」「自然環境を利用した観光」について、学生が事前に学習し

情報収集ができるように、担当者からの指示や情報提供を行うなどの工夫をした。

実際のオーストラリアと和歌山を結ぶ中継授業では、視覚的に現地の情報を得ると共に、現地のスタッフや観光客と質問やコメントのやり取りを行うことにより、リアルタイムで交流することができ、学生は「生の」情報と「体験」を得ることができた。さらに事後学習の一環として『感想シート』を授業後レポートとして課し、通信授業の体験を振り返る機会とした。

今回の通信授業を振り返ると、次のような効果があったといえる。一つは、無料で手軽に使えるテクノロジーを利用することによって、担当者が高度なテクノロジーの知識や技術がなくても、また高額な器機設備がなくとも通信授業を実施できた点で、担当者の負担が少なく、少人数で誰にでも実施可能な国際プログラムの例となったことである。同時に、現地とのリアルタイムでの双方向の交流を可能とした授業展開は、観光教育の方法論において、海外との双方向交流によって、グローバルな視点で、学生の視野を広めつつ、観光分野および言語学習の動機を高め、コミュニケーション力の育成にもつながるというユニークな観光教育の事例といえよう。

2008年より和歌山大学観光学部では、「ハワイの観光開発」という遠隔授業を開設している（東・戸塚・ウエノ・肥田木：2009）。学生がキャンパスにいながらにして、ハワイ大学からの通信や面接授業を通して、ハワイの事例から観光を学ぶことができる。本授業は、正規科目として多数の学生を対象とした専門コア科目である。一方、今回の加藤・東共同ゼミでの通信授業は、少人数教育で、学生が個々に発言する機会を十分に持った点、様々な施設からの実況中継が可能となった点、さらに多様な人々との交流も含んだ点で、先述の授業と異なっている。今後は、様々な特徴を有する国際プログラムを、複層的にカリキュラムとして仕組むことで、学生が「グローバルな視点からの観光」の学びにおける相乗効果が得られるだろう。

今年9月には海外インターンシッププログラムの一環として「環境責任と観光」をテーマとした研修をオーストラリアで実施した。そこでは、まずオーストラリア社会を理解し、コミュニケーション能力の向上を目的とした集中講座の後、自然利用型観光地3か所での実習を行った。講座、実習地とも本共同ゼミで訪れた中継地点を含んだが、2週間の短期間でありながら、学生の環境・国際社会への関心、学習動機、自信の向上には目覚ましいものがあったといえる。しかしながら、学生全員が海外実習の機会をもてるとは限らない。だからこそ、今回の通信授業のように、テクノロジーを活用し、より実体験に近い学習環境をつくることが必要とされるだろう。

今後は、今回明らかになった課題である、学生の積極性を養うための事前教育や教員のサポート体制についても一層の工夫を検討し、さらに質の高い国際プログラムとして開発

と実践を重ねる予定である。

注

(1) クイーンズランド大学 (UQ): 州大学5校のうち最大で、1909年創設の総合大学 (学生数: 学部生37,952、大学院生9,933、教員、研究員2,408。内、留学生6,984、113カ国)。市内西部にあり、メインキャンパスがある St Lucia は市街中心地からバス、フェリーで約20分。他に Ipswich (ビジネス)、Gatton (農学部) キャンパスがある。二期制 (1: 2~6、2: 7~12、夏期: 12~1) で、Arts, Commerce, Business などのBAは3年で卒業できるが、4年目の卒業論文を書く、学位はBA (Honours) となる。現在は多くの学生が自分の興味や就職を考えて「ダブルディグリー」(eg Arts & Science, Arts & Law, Commerce & Engineering) を最低4年かけて取っている。UQ観光学部は世界トップ5と言われ、学位はInternational Hotel & Tourism Management (3年、4年でHonours)。オーストラリアでは、韓国、中国に次いで日本語学習者が多く、日本語とビジネス、法学、工学などを組み合わせて就職に生かそうと考える学生が多い。UQ言語比較文化研究学科でも日本語の他、中国、韓国、インドネシア、フランス、ドイツ、スペイン、ロシア語、異文化間コミュニケーションコースがある。

(2) ローンパインコアラ保護園 (Lone Pine Koala Sanctuary: LPKS)

1927年設立の世界最大のコアラ保護園で、オーストラリア固有種 (カンガルー、ウォンバット、ディンゴ、デビル) を保護、飼育。「オーストラリアのシンボル」とも言える動物の見学、ふれあい、学習、および保護を観光資源としているため、体験、参加型活動が可能で、同時に安全・健康への配慮も要求される。コアラは「幼児からシニアまで」130頭おり、すべて同園で飼育している (野生種の捕獲はない)。そのうち80頭は、ビジターとの記念写真に「出演」する訓練がされており、コアラを抱いての記念撮影はLPKSの目玉商品となっている。特に海外からのビジターが多く、また加森観光の経営であることから、日本人ビジター、特に中、小規模のツアーグループが多い。日本ツアーグループ専用のカフェテリアがあり、マーケティング、飼育、カフェ各セクションに日本人スタッフが常勤している。教育活動も盛んで、小学校見学グループや大学研究、実習生も多い。ボランティアやインターンの受け入れにも積極的で、トレーニング、スタッフの安全・健康には細心の注意を払っている。コアラの捕獲が禁止となった翌年に開園したこともあり、自然保護のポリシーを強調、ごみ処理などはもちろんのこと、カフェメニューの選択などでも環境への配慮をしている。スタッフは若く、アウトドア好き、自然保護に興味を持つ人が多いため、活気にあふれたフレンドリーな職場である。(加森観光経営 <http://www.kamori.co.jp/>)

Lone Pine Koala Sanctuary, Jesmond Rd, Fig Tree Pocket, Brisbane, Qld 4069 Australia www.koala.net

(3) 事前学習の参考資料の例として: 「ローンパインコアラ園 (LPKS) 全体で学べること」

- ・野生動物を観光資源とすることにおける倫理
- ・その政策への反映、法律への対応
- ・安全、衛生管理
- ・キーパーの仕事内容: 動物管理 (コアラ、哺乳類: カンガルー、ウォンバット、マクロポッド (小さい有袋類)、爬虫類、鳥類) の管理。コアラのえさであるユーカリの葉の毎日の取り換え、ケージ掃除等も含む。また、各種の教育活動 (見学、ショー、動物に関するセミナー、鳥やカンガルーの餌付等)。

- ・学校教育活動
- ・大学性、研究生による学習、研究活動
- ・ボランティアの参加（資格、トレーニング、参加形態）
- ・ビジターの動物、自然保護活動への参加（活動、寄付）等
- ・ビジター対応
- ・ビジターの安全確保、また、ビジターに要求される責任（動物の安全、服装、行動、ノイズ、喫煙、写真撮影、環境への配慮）
- ・車いすアクセス、お年寄りへの配慮
- ・海外へのマーケティング、プロモーションのしくみ
- ・ガイド付きツアー（時間、内容）
- ・ビジター用情報（地図、案内、パンフレット、インフォメーションセンター）
- ・外国語資料（パンフレット、ウェブサイト、小冊子）
- ・内容、質（日本語の正確さ）
- ・各国ビジターのニーズの違い（土産物、ラッピング、カフェメニュー）
- ・各季節、年齢層への対応
- ・ショップでの土産物などのデザイン、質、値段
- ・日本人ビジター、団体への配慮、対応
- ・食材や食器の選択、ごみ処理などを通しての環境配慮表明等



謝辞

和歌山・オーストラリア共同プロジェクトの実施にあたり、ご協力くださったオーストラリアの皆様—クイーンズランド大学の学生や大学院研究生の皆様、図書館司書のウェイウェイ・ルイ氏、ローンバインコアラ園マーケティング、教育担当の畑井あかね氏、クイーンズランド州立図書館司書のサイモン・ファーレイ氏、そして現代美術館の教育担当であるクレア・ロバートソン氏、並びにフィオナ・クリスチャンセン氏—以上の皆様に記してお礼申し上げたい。

参考文献

東悦子・戸塚敦子・ラッセルウエノ・肥田木元春（2009）「和歌山大学観光学部遠隔教育「ハワイの観光開発」の事例に基づく研究—外国語による遠隔授業を通じて検証する観光教育の方向性」和歌山大学観光学会紀要 『観光学』 第1号

受付日 2010年10月6日

受理日 2010年11月11日